諸岡B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第489集

1997

福岡市教育委員会
諸岡B遺跡調査会

序

福岡市は、地理的に大陸に近いこともあり、古くから対外交渉の拠点として栄えてきました。

日本で最も早く稲作農耕を受容した板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館跡、中世の貿易都市・博多は対外交渉が栄んであったことを示す福岡市の代表的な遺跡です。

本書に収録した諸岡Ｂ遺跡は、板付遺跡に近く、調査では中世の水田遺構を確認しました。福岡平野の開拓史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が市民各位の文化財保護、ならびに学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。なお、調査に際しましては、有益な御助言をいただいた調査指導員の先生方をはじめ、調査の意義をよく理解し、心から協力をいただいた多くの方々に対しまして感謝申し上げます。

平成９年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　町　田　英　俊

本文目次

第１章　はじめに……1
第２章　周辺の歴史的環境……1
第３章　調査の記録……4
　１．遺跡の位置　　２．遺跡の層位
　３．遺構　　４．遺物
第４章　おわりに……13

例　　言

1．本書は、シェル・エンタープライズ株式会社の宅地造成に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課が1978年１月～３月に行った福岡市博多区諸岡２丁目に所在する諸岡Ｂ遺跡の調査報告書である。

2．本書の執筆には山崎純男があたった。

3．本書に使用した図の作製は　原　俊一、前田義人、白土義実、難波新吾、其畑真二、福岡大学歴史研究部考古班があたった。

4．本書の図の製図は山崎がおこなった。

5．本書に使用した写真は原　俊一、前田義人の撮影によるものである。

6．本書の編集は山崎がおこなった。

遺跡略号　MRB　　調査番号　7723

第1章　はじめに

1978年、福岡市博多区諸岡2丁目の一角が宅地造成されることになり、シェル・エンタープライズ株式会社から、福岡市教育委員会文化課に対して、埋蔵文化財の有無についての調査依頼があった。これを受けた文化課では、当該地が板付遺跡に近い重要地区であったため、試掘調査を実施することとなった。試掘調査は横山那継が担当し、重機で該地に3本のトレンチを入れた結果、時期は不明ながら杭列が検出され、水田遺構が存在することを確認した。試掘結果をもとに協議を行い、発掘調査を実施し、記録をとどめることになった。調査は当時、近くの板付遺跡の発掘調査に従事していた山崎純男、沢　皇臣、山口譲治があたり、1978年1月～3月までの3ヶ月間にわたって実施した。調査にあたっては、事業主のシェル・エンタープライズ株式会社をはじめ、地元各位の多大なる協力を得た。記して感謝の意を表したい。

調査体制

調査委託者　シェル・エンタープライズ株式会社

調 査 主 体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

事 務 担 当　三宅安吉（係長）古藤国雄　岡島洋一

調 査 担 当　山崎純男　沢　皇臣　山口譲治

調査協力者　森貞次郎（九州産業大学教授）横山浩一（九州大学教授）渡辺誠（名古屋大学助教授）下條信行（平安博物館助教授）後藤直（福岡市立歴史資料館）藤井功（福岡県教育庁文化課長）

調査補助員　原　俊一　前田義人　松風　満　伊崎俊秋　市橋重喜　上野修一　奈良崎和典　白土義実　其畑真二　千々和謙策　森　邦雄　堀川克二　倉田浩一　福岡大学歴史研究部考古班（所属は当時）

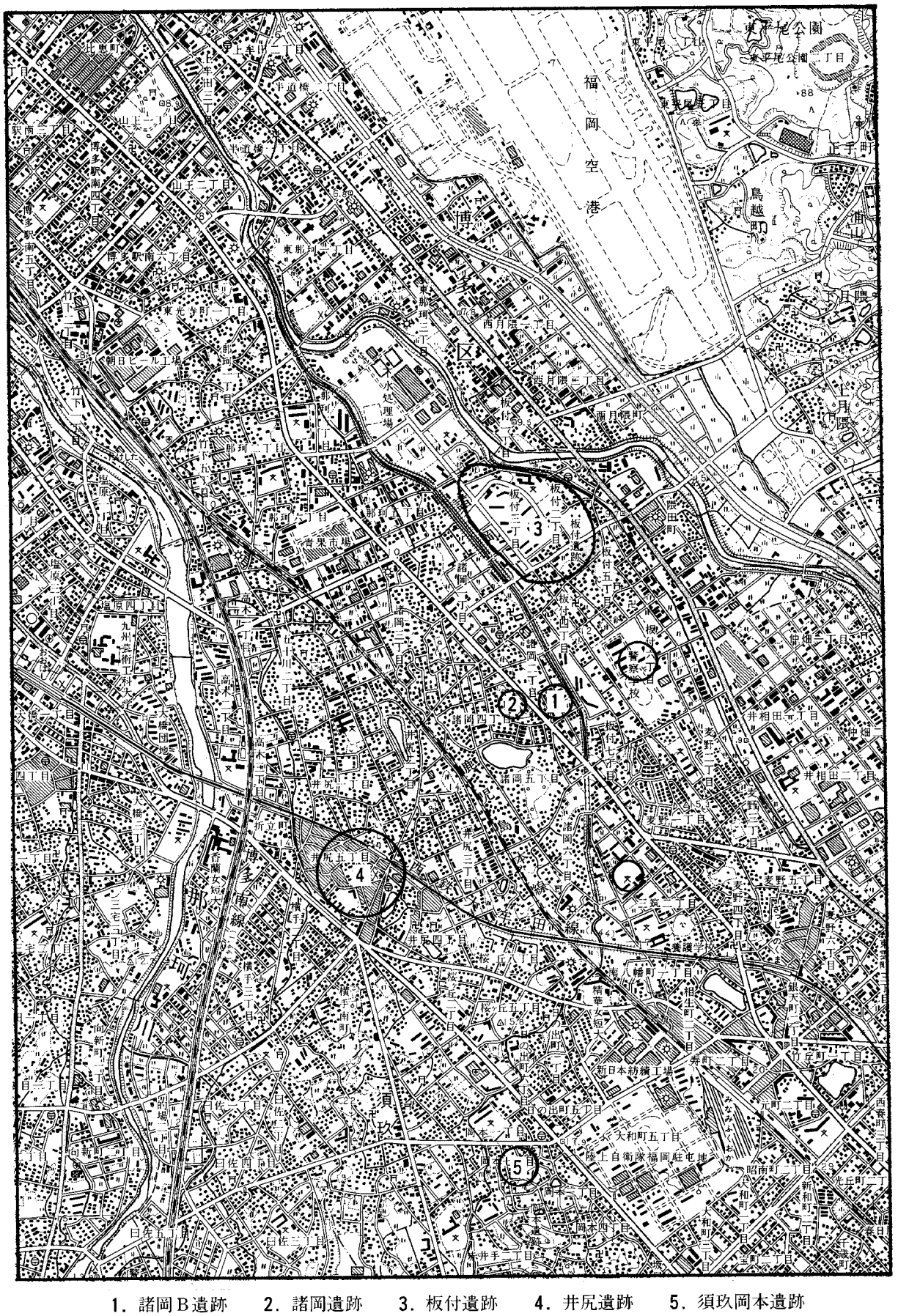
第2章　周辺の歴史的環境

諸岡B遺跡をとりまく歴史的環境は、旧石器時代よりはじまり連綿と続いているが、特に弥生時代においては、板付遺跡をはじめとして著名な遺跡が集中し、一つの中心地域をなしている。

旧石器時代の遺跡は数が少ない。本遺跡のすぐ北西にあたる諸岡の丘陵からは有望な遺跡が発見されている。周辺では唯一、該期の包含層が明らかにされた遺跡である。遺跡は大きく3地点に分かれていて、ナイフ形石器文化期～細石器文化期まで存続する。この他、板付遺跡、三筑遺跡、井相田遺跡、那珂遺跡から点々と石器が発見されているが、散発的である。ただし、最近、那珂の低段丘面において、包含層が確認されつつあるので、福岡平野における旧石器時代の様相が明らかになるのは時間の問題である。

縄文時代の遺跡も前時代同様に少ない。板付遺跡や諸岡遺跡で早期の押型文土器が出土している程度である。が、最近、井相田で縄文時代の埋没林が発見され、縄文前期の土器が出土した。今後、低地の遺跡の調査が進めば、当該期の解明もかなり進むものと思われる。今後に期待できよう。

弥生時代の遺跡は旧石器、縄文時代に比較し急増する。諸岡B遺跡の北東に位置する板付遺跡は、弥生時代開始期の遺跡として著名である。丘陵上には環濠集落が営まれ、東西の沖積地に水田が営まれている。また、丘陵の数ヶ所に墓地が形成され、弥生時代の集落構造を良く示している。板付遺跡の周辺には弥生時代の開始期の遺跡が点々と存在し、諸岡川の流域を中心に開拓が始まったことを示



1. 諸岡B遺跡　2. 諸岡遺跡　3. 板付遺跡　4. 井尻遺跡　5. 須玖岡本遺跡

Fig.1　遺跡の位置と周辺遺跡

Fig.2　①遺跡全景（北から）　②発掘調査風景

している。また、諸岡遺跡からは、前期末の土器に伴い朝鮮無文土器が多量に出土している。板付田端には前期末の墳丘墓が形成され、金海式甕棺から、銅剣・銅矛各３口が、諸岡遺跡の甕棺墓からは、細形銅剣１口と南海産貝製腕輪が出土している。

古墳時代は、弥生時代遺跡を継承する形で存在する。板付遺跡では竪穴住居址や水田遺構が検出され、三筑遺跡では５世紀代の水田遺構が検出されている。古墳の築造は水田地帯の平野部であるため少ないが、那珂八幡古墳や剣塚古墳などの前方後円墳が那珂の丘陵上に形成され、諸岡と板付の丘陵に小円墳が築造されるが、後期群集墳の存在はなく、後期群集墳は平野の東側の月隈丘陵に集中している。

古代、中世も前時代を継承している。今回調査した諸岡Ｂ遺跡の水田遺構は資料の少ない中世の所産であり、弥生時代以降の開田のあり方を知る上では貴重な資料といえる。

第３章　調査の記録

１．遺跡の位置

諸岡Ｂ遺跡は福岡平野のほぼ中央に位置する。行政区画上は福岡市博多区諸岡二丁目に属する。福岡平野の東側を北流する御笠川は本遺跡の東約１㎞にある。御笠川の西側には中位段丘Ⅱ面の段丘面が広がる。この段丘は下位に八女粘土層、鳥栖ローム層が堆積していて、段丘面は平坦であるが、諸岡丘陵のようにやや小高くなっている所もある。また、段丘面には流路による侵蝕でいくつもの谷が形成され、流路をはさんだ谷は沖積層となり、この部分が水田として利用されている。諸岡Ｂ遺跡はこのような谷の一つ、諸岡川流域の左岸に立地している。調査区は低位段丘から流路の氾濫原にかけての所にあたる。諸岡Ｂ遺跡の北西部はすぐに諸岡遺跡群をのせる諸岡丘陵が位置し、流路をはさんだ対岸の北東部には板付遺跡とその水田遺構が広がっている。

調査区の設定は、試掘調査の成果を加味し、排土処理を考慮に入れ、先ず敷地の北側に片寄って２ｍ×13ｍのトレンチ（１Ｔ）を設定し、１Ｔの東端で１Ｔに直交するように３ｍ×11ｍのトレンチ（２Ｔ）を設定し、遺構の拡がりから５ｍ×３ｍのトレンチ（３Ｔ）を設定した。発掘区は結果的にコ字形をなす。

２．遺跡の層位

各トレンチの層位は沖積地のため一様でない。以下、各トレンチの土層をみていこう。

１トレンチ北壁（Fig.4－①、Fig.5－１）

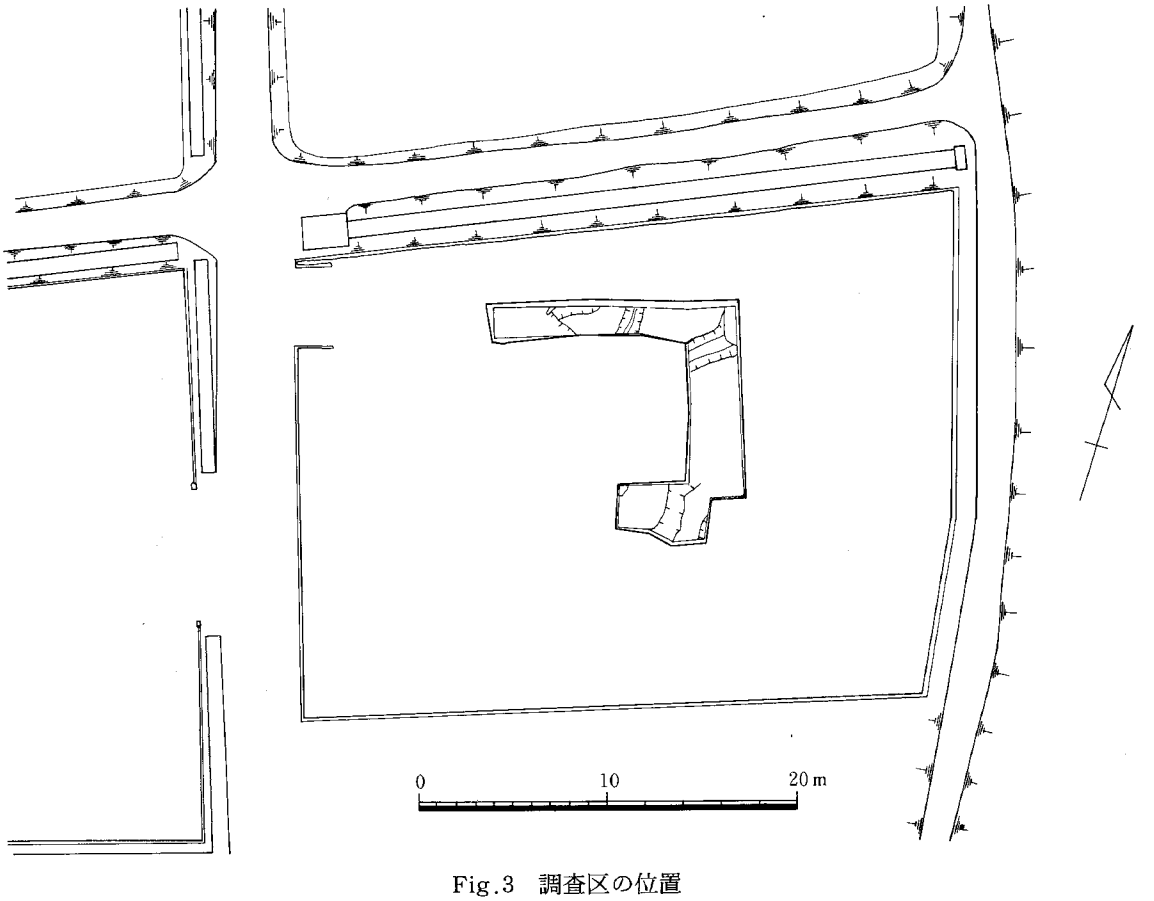


Fig.3　調査区の位置

Fig.4　発掘区土層断面写真①SD-01　②2T南壁　③2T東壁

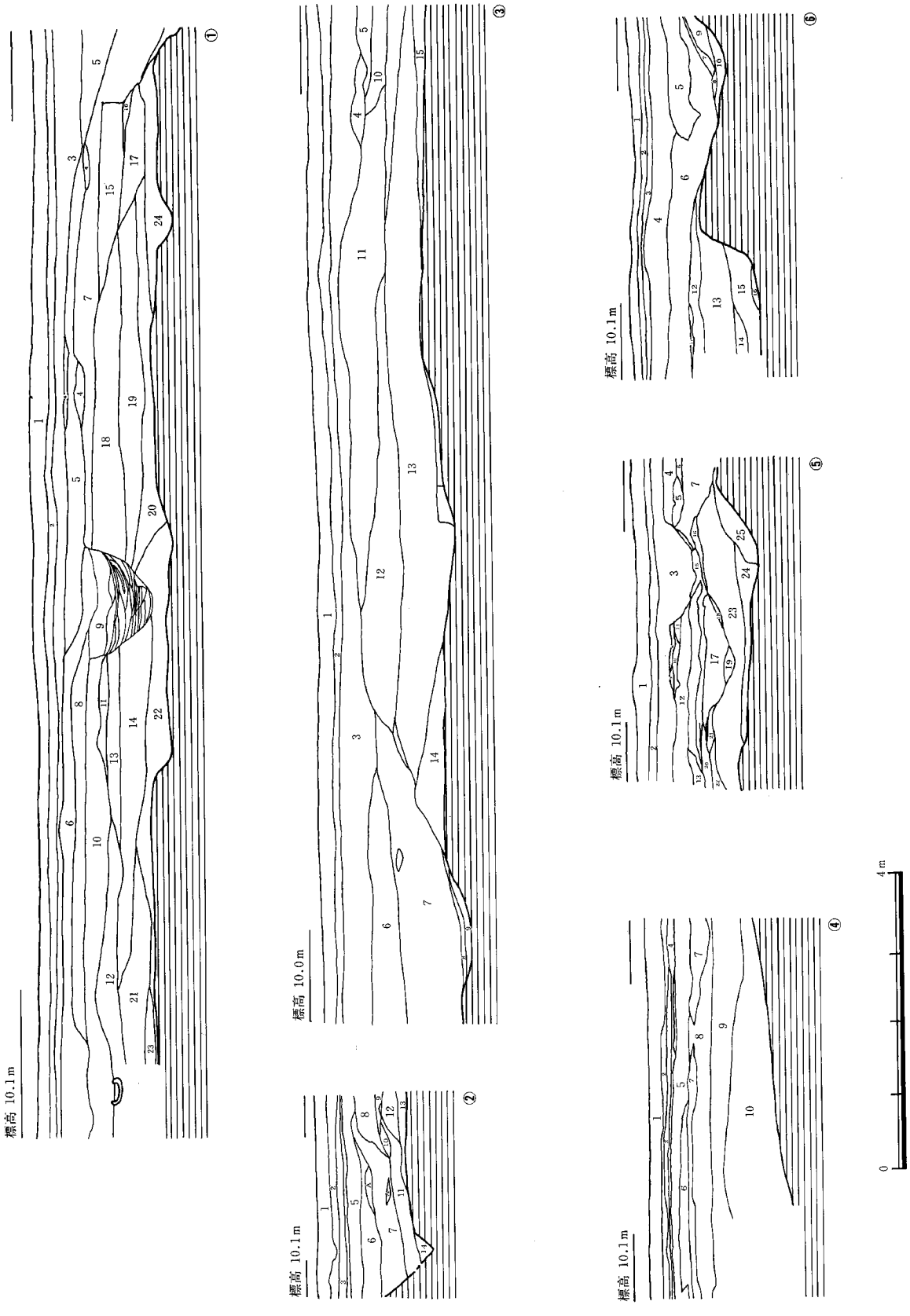


Fig.5　発掘区土層断面実測図

第１層　水田耕作土（表土層）茶褐色粘質土、第２層　水田床土、黄褐色砂質土、第３層　茶褐色砂質土、第４層　砂層のブロック層、第５層　茶褐色砂質土、第６層　暗茶褐色砂質土、第７層　茶褐色砂質土、第８層　茶褐色粘質土、第９層　溝の堆積土、上部は黒色砂質土、下位は黒色粘質土と砂層の互層、第10層　淡茶色混砂土、第11層　褐色粘質土、第12層　黒色粘質土、第13層　暗黒色粘質土、第14層　暗灰白色粘質土、第15層　黒色混砂粘質土、第16層　暗茶褐色砂質土、第17層　黒色微砂層、第18層　暗紫色粘質土、第19層　暗灰色粘質土、第20層　暗黒色粘質土、第21層　暗灰黒色粘質土、第22層　淡黒色粘質土、第23層　青灰色粘土層、第24層　灰白色砂質土となっている。

２トレンチ南壁（Fig.５−②）

第１、２層は前者と同じ。第３層　褐色混粗砂土、第４層　褐色粗砂、第５層　暗褐色混粗砂土、第６層　灰褐色土、第７層　灰褐色粘質土、第８層　灰褐色砂、第９層　灰色粘質土、第10層　灰黒色砂、第11層　黒色混砂土、第12層　灰黒色細砂、第13層　青灰色細砂、第14層　灰褐色粘質土。

２トレンチ東壁（Fig.５−③）

第１、２層は他と同様である。第３層　茶褐色混砂土、第４層　灰褐色粘質土、第５層　灰褐色砂質土、第６層　灰褐色砂層、第７層　黒色粘質土、第８層　黒色細砂、第９層　黒色粘質土、第10層　灰褐色粘質土、第11層　茶褐色砂質土、第12層　黒色砂質土、第13層　黒色混砂土、第14層　黒色砂質土となっている。

１トレンチ南壁（Fig.５−④）

第１層　水田耕作土、第２〜４層　水田床土、第５層　茶褐色混砂土、第６層　茶褐色砂質土、第７層　黒色混砂土、第８層　暗褐色砂質土、第９層　茶褐色砂質土、第10層　青灰色微砂土となっている。

３トレンチ南壁（Fig.５−⑤）

第１層　水田耕作土、第２層　水田床土、第３層　淡茶褐色混砂土、第４層　粗砂、第５層　黄色

Fig.6　①下層遺構全景
②SD−04全景

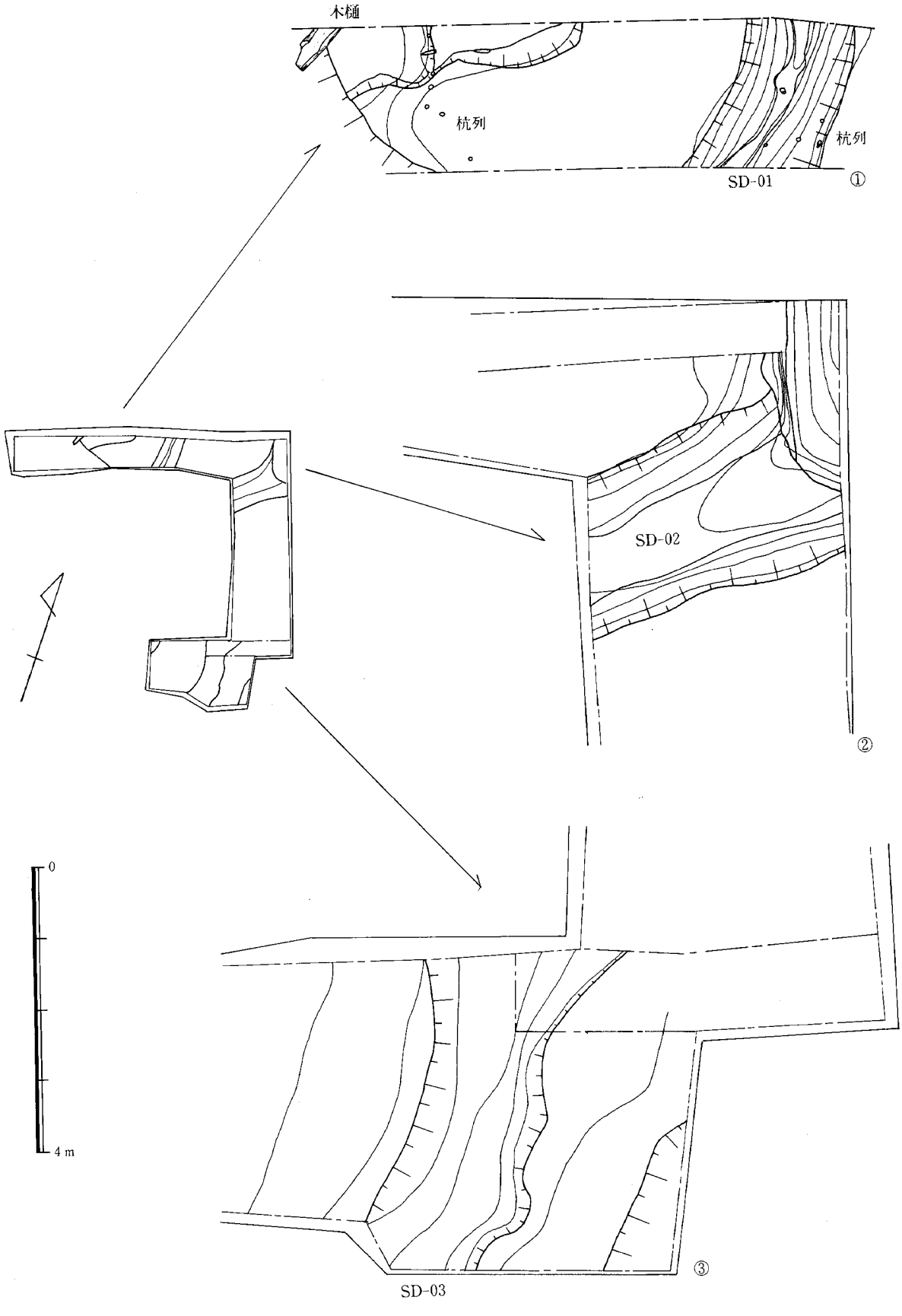


Fig.7　発掘区上層遺構実測図

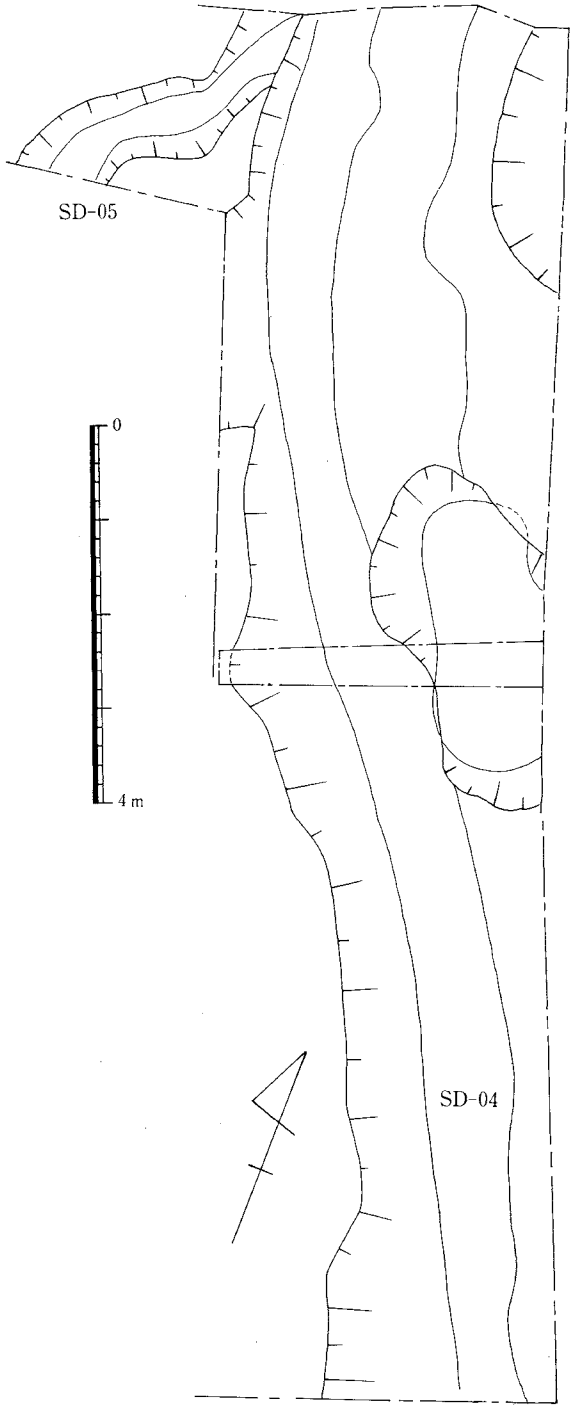


Fig.8　発掘区下層遺構実測図

細砂、第６層　白色細砂、第７層　暗褐色混細砂土、第８層　淡黄色砂、第９層　白砂、第10層　砂、第11層　微砂、第12層　黄褐色粗砂、第13層　黄褐色砂質土、第14層　暗褐色土、第15層　黄褐色砂層、第16層　暗褐色細砂、第17層　黒色有機質土、第18層　第19層　暗黒色細砂、第20層　茶褐色砂質土、第21層　灰色微砂、第22層　暗黒色微砂、第23層　暗灰黒色粘質土、第24層　黒色粘質土、第25層　青灰色粘質土となっている。

２トレンチ西壁（Fig.5－⑥）

第１層　水田耕作土、第２、３層　水田床田、第４層　褐色混砂土、第５層　褐色砂、第６層　灰褐色粘質土、第７層　褐色粘質土、第８層　黒褐色粘質土、第９層　暗褐色混砂土、第10層　黒褐色混砂土、第11層　砂ブロック、第12層　黒色混砂土、第13層　暗灰色粘質土、第14層　黒色粘質土、第15層　青灰色粘質土、第16層　黒色粘質土となっている。

３．遺構（Fig.6～10）

検出した遺構は溝、木樋、取排水口、杭列等で、いずれも水田に伴う遺構である。溝は１トレンチで１条（SD-01）　１トレンチと２トレンチのコーナーに１条（SD-02）　３トレンチに１条（SD-03）また、２トレンチの下層において２条（SD-04、05）の計５条を確認した。また、溝ではないが１トレンチの西端に落ち込みがみられ、自然の流路と見られるが、確認するにいたっていない。この流路にとり付くように木樋と取排水口とみられる浅い溝が存在する。杭列は１トレンチと２トレンチに各１条を確認した。以下各遺構について述べる。

SD-01（Fig.4－①　Fig.7－①）

ほぼ南北に延びる溝である。長さ2.2cmを確認した。幅1.46m、深さ50cm、断面形はU字形をなす。東岸に杭５本が不規則に打ち込まれている。埋土は先に説明したように下位は黒色粘質土層と砂層の互層で、上位に黒色混砂土が堆積する。

SD-02（Fig.7－2）

南西から北東に延びる溝である。コーナー付近で北に屈曲するか、他の溝と合流するかであるが明確にはできなかった。長さ4.8mを確認したが、両端とも壁中にのびる。幅2.2m～2.5m、深さ40cm～90cm、北側が一段深くなる。断面形はU字形をなす。段差がつく縁に杭が流路を横断するように4本打ち込まれている。下流が一段深くなることを考えれば、この部分に小規模な井堰がつくられていた可能性もある。

SD-03（Fig.7－3）

ほぼ南北に延びる溝である。長さ4.4mを確認したが両端は壁中にはいる。位置的にはSD-02と同一の溝である可能性が強いが確認はしていない。幅1.6～2.6m、深さ20cmと浅く、断面形はⅢ形をしている。この溝の1.5～2.0m離れた東側に平行して溝状の落ち込みがあるが全形は確認していない。

SD-04（Fig.8）

南東から北西に延びる溝である。長さ14.6mを確認した。両端はさらに延び壁にはいる。幅3.2m以上で、東岸は確認していない。自然の落ち込みである可能性もある。深さ50cmを測る。溝底には部分的に土杭状の落ち込みがある。土杭は長径1.9m×短径0.95mの不整楕円形プランで、深さは25cm前後である。SD-05と連接する。

SD-05（Fig.8）

南西から北東にのびる溝である。直線な溝ではなくわずかに蛇行している。長さ3.6mを確認した。北側でSD-04と連接し、SD-04に流れ込むようになっている。南側にさらに延び壁中にはいる。幅70～80cm、深さ30cm、断面U字形をなす。支線的な水路と考えられる。

取排水口（Fig.7－①）

1トレンチの両端近くに検出した溝状の遺構である。半分がトレンチの壁中にはいり全形を知ることができないため、用途を正確に判断できないが、水路状の落ち込みに連接することや溝が途中で止まることから取排水口と考えた。重複する杭列Ⅰを畦畔と考えれば整合性がある。水口は長さ3.6m、幅30～100cm＋2、深さ10cmで、東から西に傾斜している。

樋（Fig.5－①　Fig.7－1　Fig.9－①）

1トレンチの北壁中に検出した木樋である。第12層中に存在する。木樋はトレンチの壁から約80cm露出し、先端は水路状の落ち込みに注いでいる。前述した取排水口と重複する関係にあるが、層位的

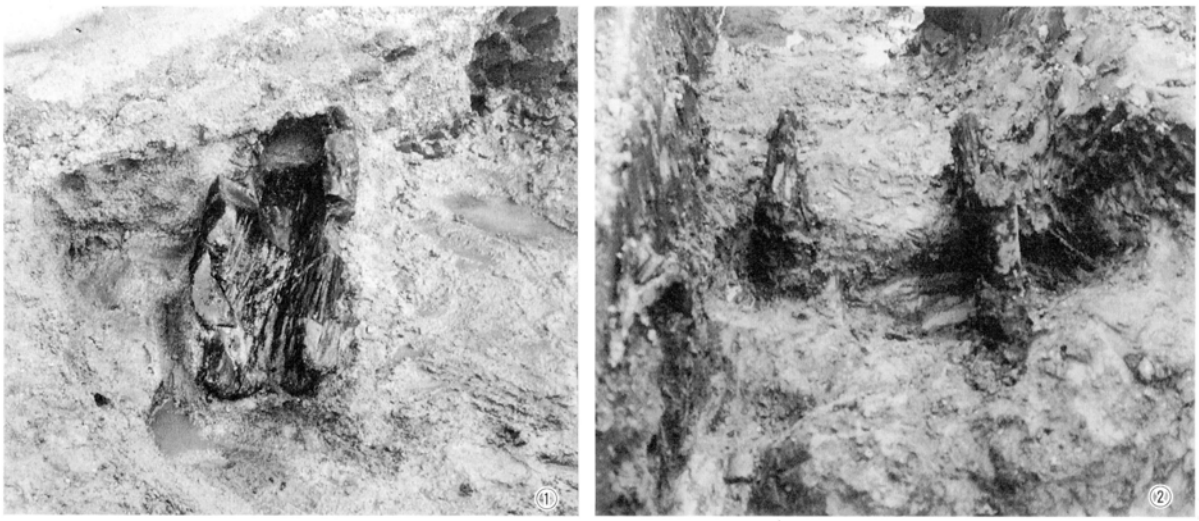


Fig.9　調査区検出の遺構　①木樋　②杭列

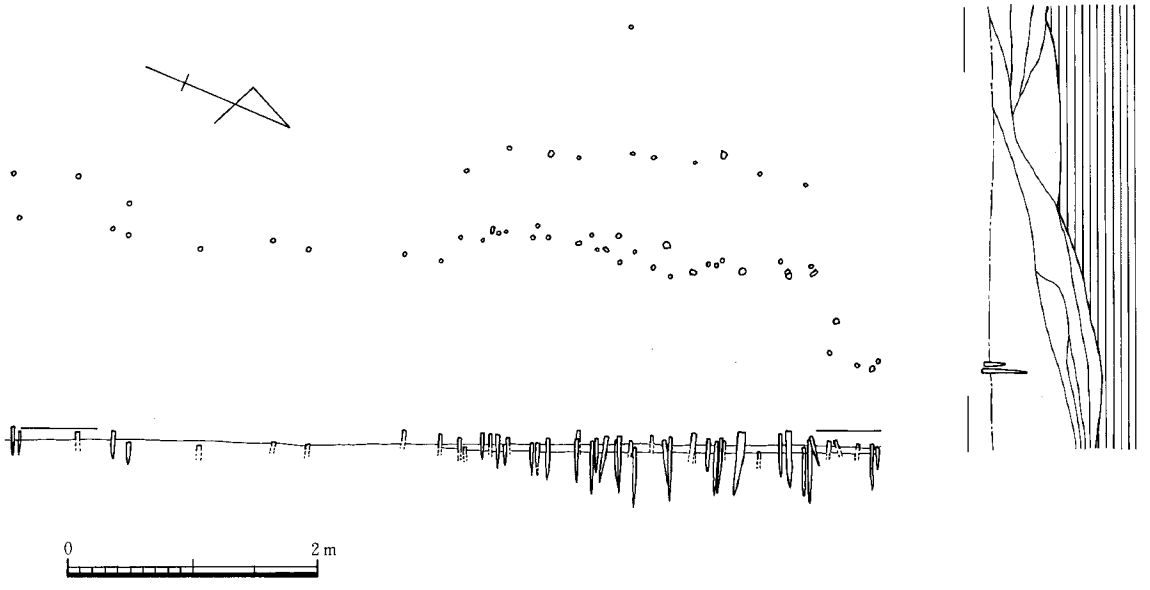


Fig.10　調査区検出の杭列実測図

には木樋の方が新しい。木樋は幅40cm、高さ10cm、内側をU字形にえぐっている。

杭列Ⅰ（Fig.7－①　Fig.9－②）

1トレンチの西端近くに検出した杭列である。取排水口と重複するが、その前後関係は明らかでない。むしろ同一時期と考えれば機能的にも合致する。杭列はほぼ1トレンチに直交する形で検出されている。やや部分的であるが約50cm離れて2列ある。東側列は約1.5m離れて2本の杭が打ち込まれる。両側列は7本の杭がやや密に打ち込まれているが、南側はやや粗である。幅50cmの畦畔の土留用に打ち込まれた杭列と考えることができる。

杭列Ⅱ（Fig.10）

2トレンチの中央部に検出した杭列である。杭列はトレンチに平行する形で、東西に70～80cm離れて平行に二列存在する。東側列は41本の杭が一部二重になりながらも直線的に打ち込まれ、北端部が東側に約40cm屈曲し、確認した杭列は長さ7.0mを測る。西側杭列は13本の杭が3.2mの長さで直線的に打ち込まれている。杭列Ⅰ同様に畦畔に土留めに杭が打ち込まれたと考えられる。

4．遺物（Fig.11、12）

出土遺物は極めて少なく、時期を示すものとして土師器の小片2個がある。いずれも図示できないが、糸切の底部をもつもので、中世後半の時期が与えられる。その他はいずれも杭である。代表的な杭をFig.11、12に図示した。

杭には丸太杭と割材の杭の2種類がある。1は長さ26cm、直径2cmの丸太杭、先端の13cmに削り加工を入れる。2は長さ12cm、直径2.6cmの丸太杭、先端の6cmに削り加工を入れる。3は長さ25cm、直径3.4cmの丸太杭、先端の8cmに削り加工を入れる。4は長さ26cm、直径6cmの丸太杭、先端の9cmに削り加工を入れる。5は長さ46cm、、割板杭、先端の8cmに削り加工、6は長さ40cm、直径4cmの丸太杭、先端の15cmに削り加工を入れる。7は長さ32cm、直径4cmの丸太杭、先端の10cmに削り加工を入れる。8は長さ33cm、直径3cmの丸太杭、先端の5cmに削り加工を入れる。9は長さ30cm、直

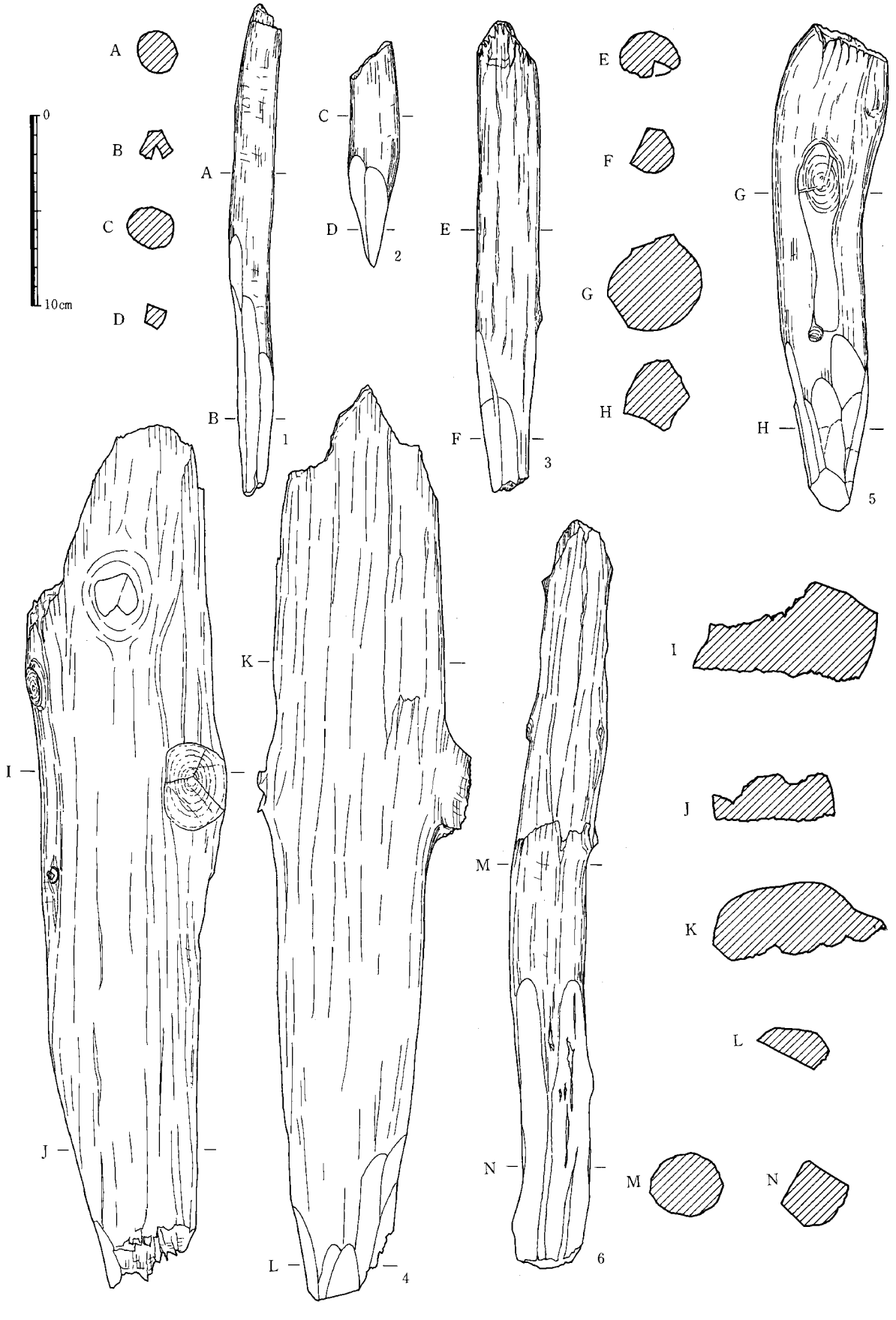


Fig.11　杭実測図Ⅰ

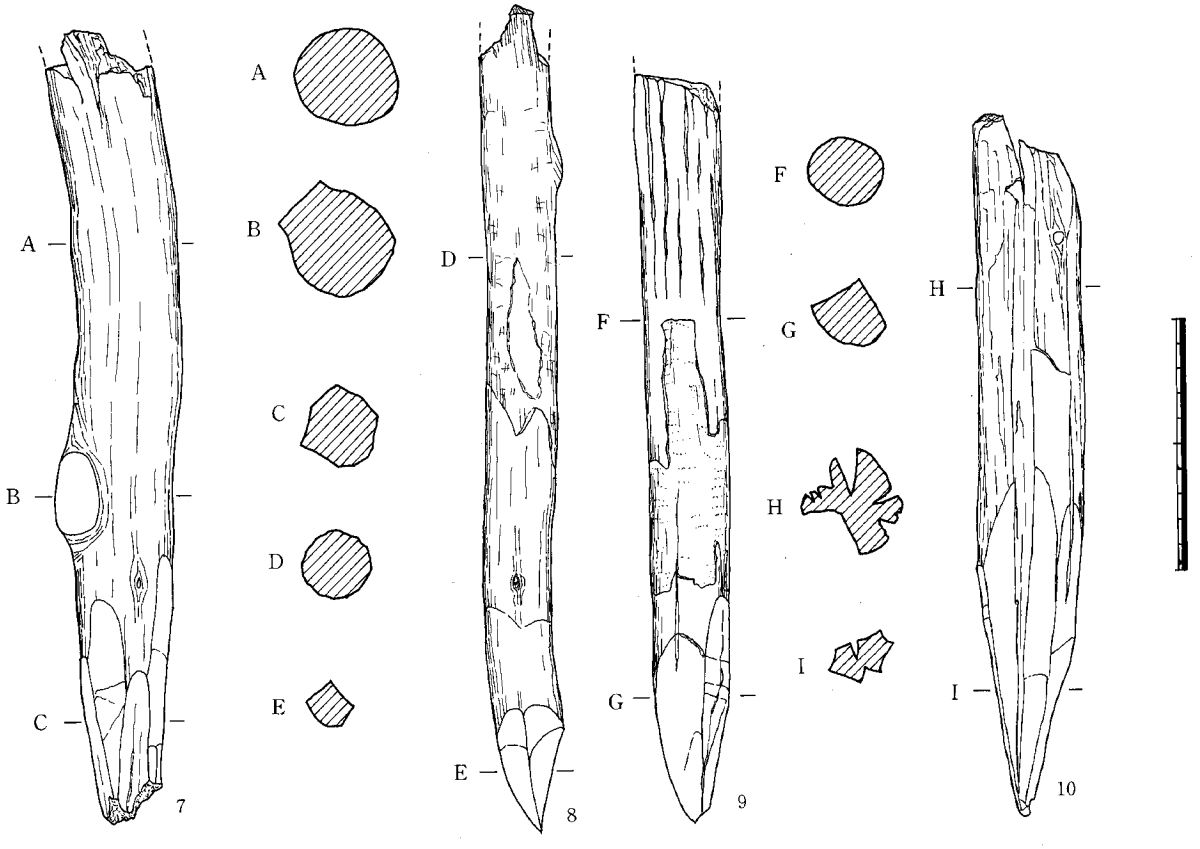


Fig.12　杭実測図Ⅱ

径３㎝の丸太杭、先端の９㎝に削り加工を入れる。10は長さ28㎝、直径４㎝の丸太杭、先端の14㎝に削り加工を入れる。丸太杭にはいずれも樹皮がつき、枝は丁寧に打ち落されている

第４章　おわりに

諸岡Ｂ遺跡の調査は、調査対象造成地の制約上、小範囲に終ったが、その成果は、福岡平野の開田問題を考える上には、かかせない資料を得ることができた。本遺跡の立地する諸岡川流域は日本の中で最も早く開田された地域であるが、中世になってもまだ開田されていない地域があったことに少なからず驚いている。本遺跡で検出した上下に重なる溝や杭列の存在は、この地域がながらく湿地状態で放置されていたことを知ることができる。しかし、この想定は、調査区が狭いために正確を期しがたく、今後、周辺の大規模な調査によって訂正されることを願うものである。

なお、今回検出した杭列を同時期とみれば水田の区画を想定することは、そう無理ではない。杭列Ⅰ、Ⅱは共に平行しており、これを対応する畦畔をみれば、東西は幅10ｍの水田となり、南北は、杭列Ⅱの屈曲部分や取排水溝の位置関係からみて、そう長くなるものではない。長方形に近い水田区画の拡がりとみてよかろう。

諸岡B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第489集

平成9年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
諸岡B遺跡調査会

印刷　株式会社　川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号

諸岡B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書489集

1997

福岡市教育委員会